令和５年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標		具体的取り組み	主担当	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果・課題）及び後期の扱い	評価
1	授業実践力の向上 （教科指導の充実）	各部で教科学習の授業シートをもとに授業検討会をして、授業ビデオをもとに事後に改善について整理会を行う。PDCAサイクルで実践力の向上を目指す。	教務課 （研究）	授業づくりのPDCAサイクルが機能し、教科指導の充実に結びついたと実感した教員の割合が Ａ：８０％以上である。 Ｂ：７０％以上である。 Ｃ：６０％以上である。 Ｄ：６０％未満である。	授業づくりのPDCAサイクルが機能し、教科指導の充実（指導案検討等）に結びついたと実感した教員の割合が ８５％であった。	教員へのアンケートにより教科指導の充実に結びついたと感じているという結果になっている。後期になり、各部で実行・評価・改善のサイクルが進み、「課題設定の工夫」や「相互評価を取り入れた授業」、「自立に向けた授業」等の研究が進んだためと考える。授業づくりは「これで終わり」というものがないので、今後もしっかりPDCAサイクルを継続させていく必要がある。	A
2	地域社会との連携	地域にある長寿園、公民館、保育園等との交流を行い、児童が色々な人と関わる経験を積めるようにする。	小学部	交流の前後で児童が主体的に活動していたかなどの変容が３段階評価で「とても見られた」「見られた」と答えた教員の割合が Ａ：８０％以上である。 Ｂ：７０％以上である。 Ｃ：６０％以上である。 Ｄ：６０％未満である。	３段階評価で「とても見られた」「見られた」と答えた教員の割合が、１００％であった。	小学部では、公民館の方との花植え、地域の保育園との交流、地域でのりんご狩り、長寿園との交流を行った。１２月に行った長寿園との交流では、初めての場所や相手ということもあり、初めはやや緊張している様子だったが、ダンスの発表や、ペアや集団での活動では、意欲的に発表したり、自分から関わったりといった主体的な姿が見られた。来年度も児童の実態に応じて、交流先や活動内容の幅を広げていきたい。	A
		中学部では、公民館交流や里山里海学習、高等部では、地域での販売実習や外部団体（里海研究所、公民館、長寿園、など）と連携した取組を実施していく。また、新たに駐在所や消防団、地域企業の見学、保育所交流を行っていく。	中学部 高等部	３段階評価で「大変よかった」と答えた教員の割合が Ａ：８０％以上である。 Ｂ：７０％以上である。 Ｃ：６０％以上である。 Ｄ：６０％未満である。	３段階評価で「大変よかった」と答えた教員の割合が 中学部では　７　回　１００％ 高等部では　２　回　　８０％ となり、両学部の平均は９５％であった。	中学部では、前期に公民館と関わる活動が２つ、キョーワの工場見学や駐在所訪問、後期にごみについての里海学習と珪藻土についての里山学習を行った。生徒が地域を知る、生徒自身の活動が地域とつながっていると実感できる取組になった。 高等部では、前期に里海研究所と連携しながら地域資源の珪藻土や火成岩を釉薬とした陶芸製品を新たに製作し、いしかわエコデザイン賞にて高く評価された。１月からは公民館や長寿園などとの交流を企画していたが、今回の災害に伴い活動を自粛することとした。	A
3	安心・安全な学校づくり （メディア・ＩＣＴの適切な活用）	全学部で、児童生徒の実態に応じてメディアやＩＣＴ機器の使用についての情報教育を行う。	全学部	メディア・ＩＣＴ機器の適切な活用に関する授業を行った回数が Ａ　８回以上である。 Ｂ　７回である。 Ｃ　６回である。 Ｄ　５回以下である。	メディア・ＩＣＴ機器の適切な活用に関する授業を行った回数が 前期　１１回、後期　４回 合計　１５回であった。	前期は、ＩＣＴ機器の使い方が中心であり、情報モラルなど安全な情報教育について課題であったが、後期は、中学部でタブレット端末を教具として校内ウォークラリーを行う授業が行われた。また、高等部では人権教育と合わせて情報モラルについてルールやマナーの指導が、中学部では情報リテラシーの学習でＩＣＴ機器の安全な使い方などの指導が行われた。今後は、小学部から中学部、高等部へと系統的な情報教育を行っていく必要がある。	A

石川県立七尾特別支援学校珠洲分校